

競馬を書くことで生きる

治郎丸敬之

私の夢は大学で競馬を教えることだった。

競馬学とか馬券学とか勝手にそれらしい名前を付けて、大学の大きな教室の教壇に立ち、雄弁を振るっている自分の姿を夢見ていた。その頃から、競馬は学問であるという認識が強かったのだろう。競馬をギャンブルとしてしか見ない世間に対する強がりだったのかもしれないが、私にとっては、大学で教えてもらったどの学問よりも競馬は学問であった。「競馬を学問にする」が私の夢であったとも言える。

私にも一応、就職活動というものをした時期がある。

自分がやりたいことと世の中にある仕事とのギャップに驚いてばかりで、まるで不良馬場を走っている競走馬のように、私の足はなかなか前へと進もうとしなかった。そんな私を見かねたのか、父親が友人である経営者に話を聞いてもらう手はずを整えてくれたことがあった。その会社にコネで入るというやましい話ではなく、私が相談をもちかけることで、仕事とはなんぞやということを他人の口から聞かせたかったのだろう。

麻布の一流レストランでランチを食べながら、父の友人は迷える子羊にこう問うた。

「将来、何かやりたいことはあるのかな？」

私は「大学で競馬を教えたいです」と即答した。

今思えば顔から火が出るくらい恥ずかしい会話なのだが、

父の友人であるその経営者は、ためらうことなく「それは面白いね」と言ってくれた。

就職の相談をしにきた私から出た素っ頓狂な答えに対し、いくばくかの興味を示してくれたことに私は少なからず驚いた。

それ以外の会話については何一つ覚えていないが、若者の夢を受け入れてくれた彼には今でも感謝している。

食い扶持を稼ぐために社会に出た私は、いつの間にか夢を失ってしまった。

就職に役立つとか、資格として認められるとか、そういう即物的な効用がなければ、

大学の講座としては成立しないことが分かってきた。

そもそも、私自身が人前で話すほど弁が立たないことも思い知らされた。

全ては世間知らずの若者の夢物語であった。それでも、夢を失ってしまった私がおこうして生きていられるのは、

競馬がいつもそこにあったからに他ならない。大学で競馬を教えることは難しくとも、競馬を通して世界を観ることはできる。

寺山修司は「競馬が人生の比喩ではない。人生が競馬の比喩なのだ」と語ったが、

まさに私にとって人生は競馬の比喩であった。競馬で失ったものも少なくはないが、それ以上に大きなことを学んだ。

競馬も人生も山あり谷あり。もう一度生まれ変わっても、競馬のある人生を生きたいと思う。

ふと思えば、私はたくさんの人々に競馬を教えてもらった。

ミスター競馬こと野平祐二氏の教えが私の競馬観を形づくり、

岡部幸雄元騎手や藤沢和雄調教師は馬優先主義を貫くことの難しさと素晴らしさを目の前で体現してくれた。

井崎脩五郎氏はデータを読み解くことで競馬の違った切り口を示してくれた。

吉沢譲治氏は血統の奥深さを分かりやすく説明してくれた。

木村幸治氏はノンフィクションを通して競馬の世界の興奮と熱狂を語ってくれた。

その他、偉大なる先輩たちの書いた文章や文字となった競馬を読み、

砂漠に垂らされた水を吸い込むように私は吸収した。

今度は私の番である。

今までに教えてもらった競馬の全てを、一人でも多くの人々に伝えていきたい。

生きるために競馬を読んできた私だが、これからは競馬について書くことで生きていきたい。

それが今の私の夢である。